教育コラム「愛のかけはし」：２３５号

令和３年　５月
江差町教育委員会
学校教育課

『 教育の専門家・・ 』

私が若い頃、いわゆる公的な研修で講師の方から「教員は、専門職です」というお話をよく聞きました。当時は、「そうか。自分は教育のプロなんだ・・」と、改めて意識したものです。しかしながら、「私は、教育のプロです！」と、他者に堂々と言ったことはなかったように記憶しています。なぜなら、「教育のプロ」と公言するだけの高い指導力やその他の専門性が自分には十分に備わっているという自信がなかったので。ただ、「税金泥棒と言われないように頑張ります！」と、家庭訪問で保護者に言った記憶はあります（３校目、３０代後半頃）。

今回、「専門職」の定義を調べたところ、けっこうまちまちなことがわかりましたが概ね、「体系的な知識や学問を長期間学ばないと就けない職業で、公共の奉仕への指向性が高い」ということのようです。また、「一般的には、特定の分野に特化した替えの利かない職業。特定分野の専門家。主流は、免許が必要な職業」という説明もありました。これらの定義を踏まえますと、教員は「専門職」に該当することになると思います。ちなみに、北海道教育員会では、「北海道における『求める教員像』」及び「キーとなる資質能力」を次のように示しています。

【教職を担うに当たり必要となる素養に関連する観点】
〇教育者として、強い使命感・倫理観と、子どもへの深い教育的愛情を、常に持ち続ける教員
【教育又は保育の専門性に関連する観点】
〇教育の専門家として、実践的指導力や専門性の向上に、主体的に取り組む教員
【連携及び協働に関連する観点】
〇学校づくりを担う一員として、地域等とも連携・協働しながら、課題解決に取り組む教員

上記観点それぞれに、「キーとなる資質能力」が４～５項目示されています。とりわけ、「実践的指導力」という項目については、さらに、「授業力」「生徒指導・進路指導力」「学級経営力」と分けられ、これら３つの力を求めています。

以上のような「北海道が求めている教員像」に十分に迫り、「キーとなる資質能力」を十分に身に付けると、いわゆる「教育のプロ」となり得るのだろうなと押さえています。ただ、このレベルに到達するためには、それなりの時間がかかります。この点については、北海道教育委員会としては、「養成段階（教員養成大学などで学修）」「初任段階（採用１年目から５年目）」「中堅段階」「ベテラン段階」と、計画的・継続的な研修の場や機会を設けています。しかしながら、このような研修を受けても、それで「教育の専門家」としての力量や資質・能力が備わるかと言えば、それは「人による」と捉えています。

個人的には、「教育の専門家」としての力量を高めていくために最低限必要な資質があると私は思っています（他にもたくさんあるのですが、あえて一つに絞ると）。それは、「課題意識を持っている」ことです。言い換えると「〇〇できるようになるために〇〇をやってみよう」「上

手くいかなかったら何が原因か？」「今日は、上手くいった。その要因は、○○」というようなことを日々やるかやらないかで、教員の力量に大きな差が出てくると考えます。

教員としての経験年数は、教員の専門性の向上に比例しないと思っています。若くても、課題意識を高く持って、日々の実践に取り組む方は、専門性が高くなります。いくら経験年数が長くても課題意識の低い方は、専門性はそれほど備わっていないと捉えています。子どもと同じで、どれだけ“主体的な学び”（実践的な研修や自己啓発）をしてきたかです。付け加えますが、人の話を素直に聞けることもとても大事な資質だと思っています（高いプライドが原因で他の助言を受け入れずに成長できないケースがけっこうありますので）。

さて、今年度も、当町には、いわゆる「新採用」教員が配属されました。教員採用試験という難関を突破し、晴れて公立学校の教員としての歩みを踏み出しました。教員免許状も持っていますし、大学で必要な教育課程を履修し、教育実習も経験してきていますが、なにぶんにも学校現場での実践的な経験はありません（期限付き教員をやられ、ある程度現場の経験値を持っている方もいます）。保護者対応など初めてだと思います。この１年は、教育委員会も当該学校や保護者も、地域の方も、広い心で見守っていければいいなと思っています。

ただ、「広い心で見守る」とは言いましたが、そこには、いくつかの条件があるとは思っています。まずは、教員である前に社会人としての立ち居振る舞いの基本（明るい挨拶、清潔な身なり、電話対応の基本、時間や提出期限を守る等）はできるだけ早く身に付けること。わからないことがたくさんあるはずなので、知ったかぶりしないで先輩教員や教頭先生にどんどん質問すること。そして、まわりからの助言等にしっかり耳を傾け素直に聴くこと。何かをしてもらったら、必ず「ありがとうございます」を言うこと。ここら辺ができていると、先輩教員も管理職も「教えがいがあるやつ」と思って見守ってくれるはずです。とにもかくにも、日々、明るさと元気を持って子どもたちと向き合い、授業等を頑張ってくれることを願っています。

話は少し変わりますが、教員の社会的な立場は、現在、それほど高くないのではと思っています。かつては「聖職」と尊敬され、教員や学校に対して、異議を申すことなどめったになかったように記憶しています。端的に言いますと、世の中が変わったのだと捉えています。少子化は大きな要因だと思っています。我が子の教育に対する関心の度合いが高まりました。教育に関する情報も豊富で、ネットでほぼ入手できます。保護者の方それぞれが、教育に対しての考えを持たれています。今までは、気にならなかったことも、「あれ？」と思うようになり、担任（or 学校）に質問するということもほとんど抵抗がないのではと思っています。

ところが、ある時、保護者から「学校の先生は、教育の専門家ですよね！」とズバリ言われたことがありました。その保護者のお子さんのことで、学校の対応に「なぜ？」と思われ、直接、校長と話がしたいとの申し入れがありました。校長室でお話を聞いたところ、「なるほど。それは、おっしゃる通りです。学校の対応に落ち度がありました。申し訳ありません」という展開になりました。保護者から「先生は、教育の専門家」と言われ、私は、ハッとし襟を正しました。教員への「敬意」と「専門家なのだからちゃんとやってよ」という思いが相まっての発言と推測していますが、どんな時代であろうと、「教員は、『教育の専門家』としての自覚と誇りを持って、専門性の高い仕事をしなければならない」ということを改めて胸に刻む機会となりました。